

第2節 高校生の学習観・成績観

1. 成績観

①成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後のカテゴリに6割が集中。「上のほう」よりも「下のほう」に偏った分布を示す。時系列的にみると、第1回調査以降、成績の自己評価は、徐々に下方へとシフトする傾向をみせている。



現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。

「学習に関する意識・実態調査」では、高校生の成績観を、(1)学年の中での総合的な成績の自己評価、(2)どのくらいの成績がとれたらよいか、(3)現在の成績は別として、うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うのか、という3つの側面に分けてとらえている。

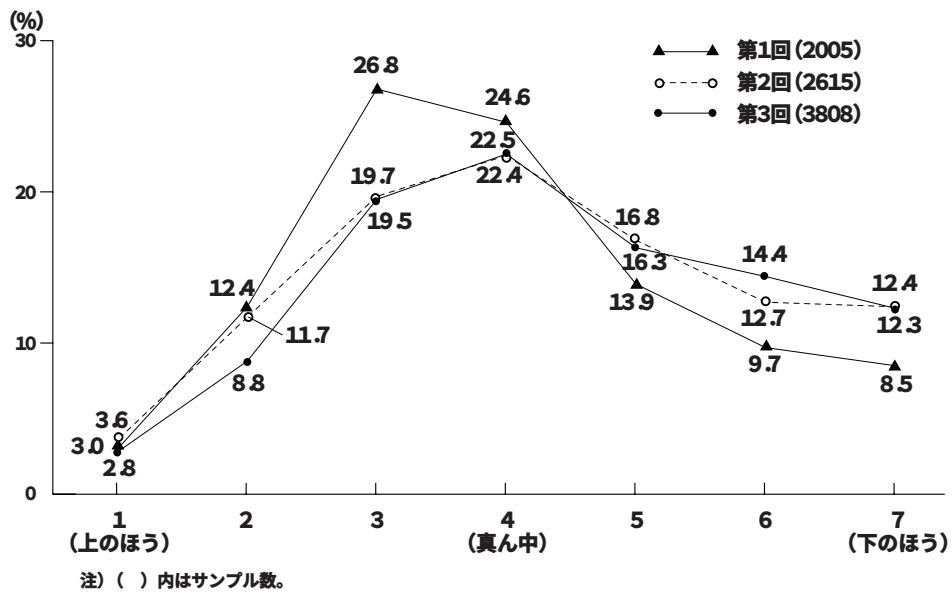
まず、学年の中での総合的な成績の自己評価である(図1-2-1)。選択肢は「1(上のほう)」から「4(真ん中)」を経て「7(下のほう)」まで7段階に分けて、いずれかの段階を選択させた。

全体としてみると、「4(真ん中)」とその前後(「3」および「5」)の3カテゴリに6割(58.3%)が集中しており、自己の成績を真ん中あたりに位置づけている生徒が多数派であることがわかる。回答を相対的に「上」(「1」「2」)、「真ん中」(「3」「4」「5」)、「

相対的に「下」(「6」「7」)に3分してみると、それぞれ11.6%、58.3%、26.7%となる。「上のほう」よりも「下のほう」に偏った分布を示し、これからみると、学年の中で、真ん中あたりよりも下位に自分の成績を位置づける生徒のほうが相対的に多い。

時系列的にみると、第1回調査以降、成績の自己評価は、徐々に下方へとシフトする傾向をみせている。自己の成績を上位2カテゴリ(「1」「2」と下位2カテゴリ(「6」「7」)に位置づける生徒の比率は、それぞれ、第1回15.4%・18.2%→第2回15.3%・25.1%→第3回11.6%・26.7%と変化してきた。この調査では、さまざまな領域について高校生の意識が時系列的にみて「自己を肯定視」する方向へと変化していることを報告しているが、その中において成績の自己評価だけは異質である。

図1-2-1 成績の自己評価（時系列）



②とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたい成績（アスピレーション）は、上位3カテゴリ（「1」「2」「3」）にほぼ9割が集中し、「真ん中」から下の成績でよいと答えた生徒は約1割にとどまる。成績に対するアスピレーションは、かなり高い水準にある。学業的能力の自己概念についても、現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、8割以上の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。高校生の学業面での能力の自己概念はかなり高いと考えられる。

ただし、時系列的にみると、とりたいと思う成績もがんばればとれると思う成績も徐々に下方ヘシフトしている。

Q

- あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。
- 現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

では、高校生はどのくらいの成績がとれたらいいと考えているだろうか。また、「うんとがんばれば」どのくらいの成績がとれると考えているのだろうか。前項でみたのは現在の成績に対する自己評価であったが、次に、(1)希望する成績の水準、アスピレーション（意欲）と、(2)学業的能力の自己評価（うんとがんばれば……）の側面をみてみよう。

まず、希望する成績の水準である。回答は大きく「上のほう」に偏っている（図1-2-2）。全体としてみると「1（上のほう）」から順に、「1」38.6%、「2」28.7%、「3」19.6%であり、この3カテゴリではほぼ9割に達する。逆に「4（真ん中）」から下の成績でよいと答えた生徒は（「4」「5」「6」「7」）合計でも約1割にとどまる。成績に対するアスピレーションは、かなり高い水準にある。

学業的能力の自己概念についてはどうだろうか。この調査では、多少妙な質問だが、「現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか」を尋ねてみた。

全体の分布をみると（前掲図1-2-2）、

「1（上のほう）」から順に28.3%、「2」35.3%、「3」21.2%、「4（真ん中）」10.0%であり、相対的に「下のほう」（「5」「6」「7」）は合計でも2.7%にすぎない。現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、8割以上の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。この意味で、高校生の学業面での能力の自己概念はかなり高いと考えられる。

この回答を、現在の総合的な成績（学年の中で）、希望する（とれたらいい）成績と比較してみよう（図1-2-2）。学業的能力の自己概念は明らかに、成績の自己評価よりもとりたい成績に近い。このことはすなわち、たとえ現在の成績は下位でも努力次第で成績の上昇が達成できるという見通しを生徒たちは持っており、また希望する成績の水準もまったく根拠のないものではなく、能力の自己概念の高さという、「主観的な」裏づけを持ったものであることを意味している。

とりたい成績と学業的能力の自己概念について、時系列的に分布の変化をみたのが表1-2-1である。表によれば、①上位の成績をとりたいと思う生徒（最上位「1」とその

次「2」の合計）は、第1回75.3%→第2回71.9%→第3回67.3%と低下しており、同様に、②うんとがんばれば上位の成績をとれると思う生徒（「1」と「2」の合計）も、第1回69.3%→第2回65.3%→第3回63.6%へとやや減少している。

時系列的にみると、とりたいと思う成績もがんばればとれると思う成績も徐々に下方へシフトしている。

とりたい成績と、がんばればとれる成績は、現在の成績の自己評価と、どう結びついているだろうか。

図1-2-2 とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

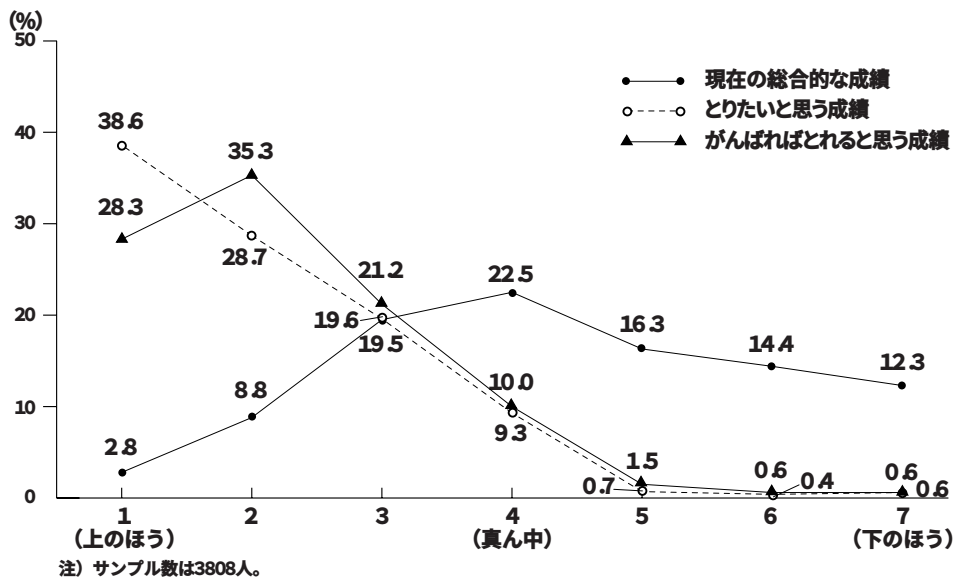


表1-2-1 とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績（時系列）

(%)

		第1回 (2005)	第2回 (2615)	第3回 (3808)
とりたいと思う成績	1 (上のほう)	43.7	43.1	38.6
	2	31.6	28.8	28.7
	3	15.3	16.3	19.6
	4 (真ん中)	6.6	9.9	9.3
	5	0.8	0.7	0.7
	6	0.3	0.3	0.4
	7 (下のほう)	0.5	0.4	0.6
がんばればとれると思う成績	1 (上のほう)	29.8	30.8	28.3
	2	39.5	34.5	35.3
	3	19.8	20.6	21.2
	4 (真ん中)	7.5	10.3	10.0
	5	1.4	2.1	1.5
	6	0.6	0.6	0.6
	7 (下のほう)	0.4	0.4	0.6

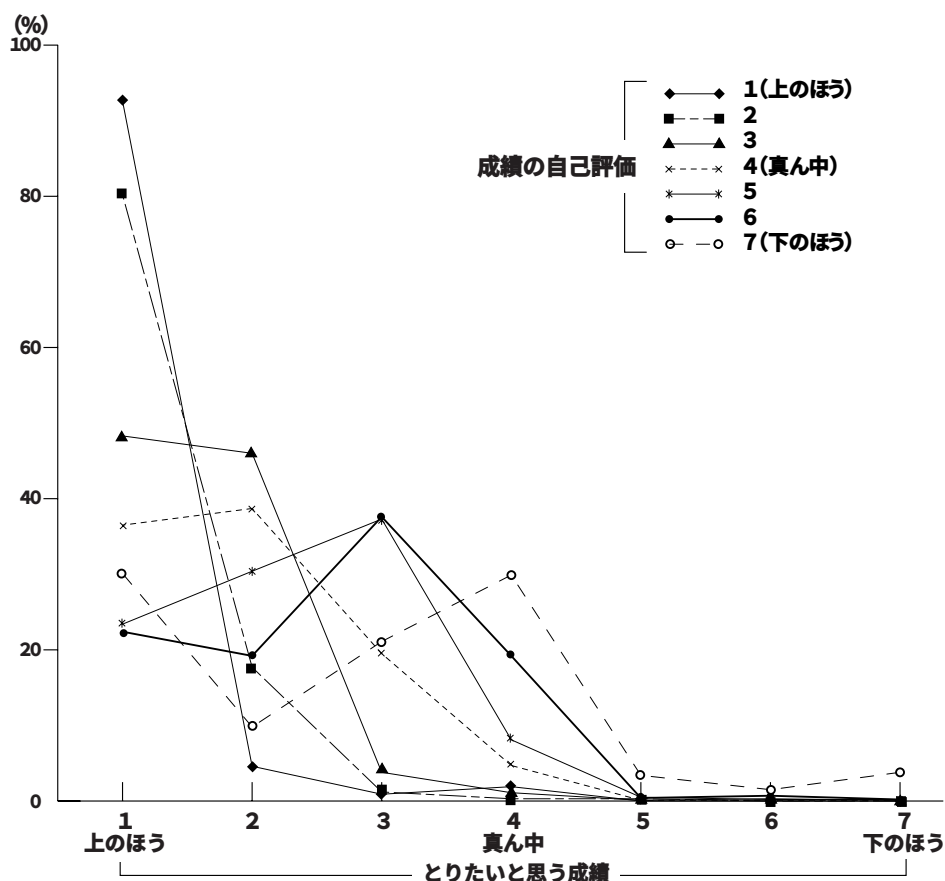
注) () 内はサンプル数。

とりたいと思う成績についてみると（図1－2－3）、成績の自己評価が上位（「1」と「2」）の生徒は、8割以上が最上位の成績をとりたいと考えている。一方、成績の自己評価が中の上以下（「3」以下）の生徒で最上

位の成績をとりたいと考えているのは、半数以下でしかない。がんばればとれると思う成績についても（図1－2－4）ほとんど同じ関係がみられる。

以上から、とりたいと思う成績の水準（ア

図1－2－3 とりたいと思う成績（成績の自己評価別）



(%)

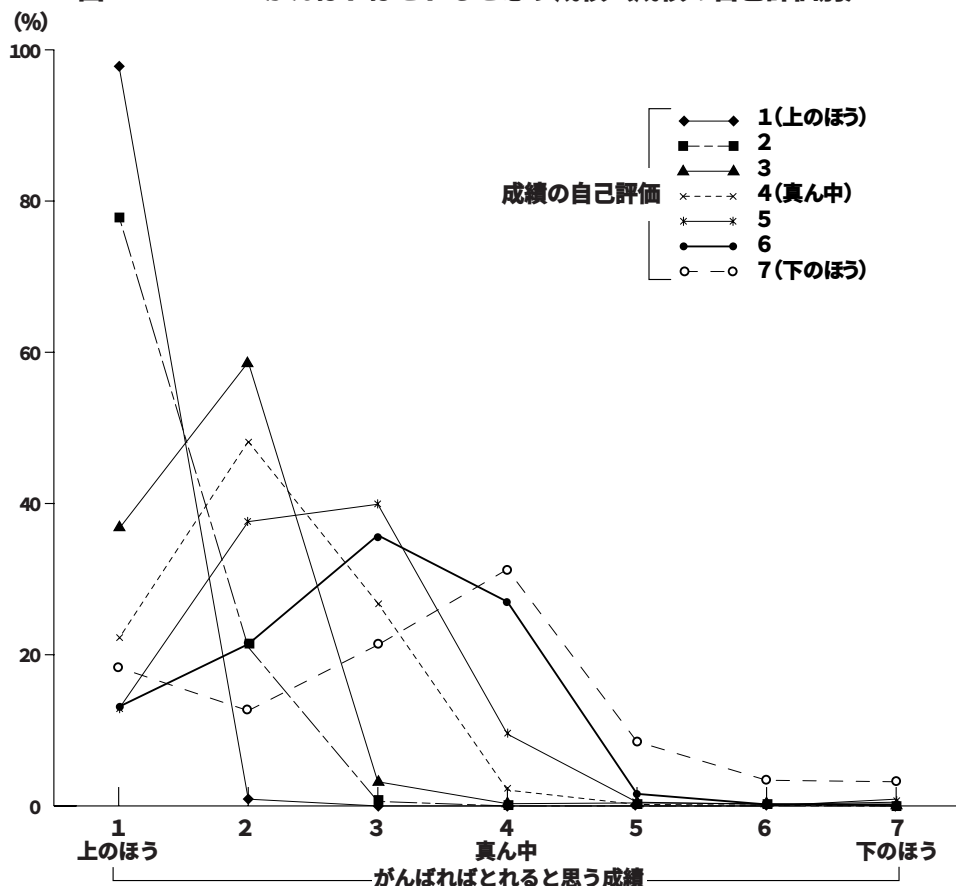
		とりたいと思う成績						
		1(上のほう)	2	3	4(真ん中)	5	6	7(下のほう)
成績の自己評価	1(上のほう)	92.6	4.6	0.9	1.9	0.0	0.0	0.0
	2	80.2	17.7	1.2	0.3	0.3	0.0	0.0
	3	48.3	46.0	3.8	1.1	0.1	0.3	0.1
	4(真ん中)	36.5	38.7	19.5	4.7	0.1	0.1	0.1
	5	23.4	30.4	37.3	8.1	0.5	0.2	0.2
	6	22.4	19.2	37.6	19.2	0.4	0.7	0.2
	7(下のほう)	30.1	9.8	21.1	29.9	3.4	1.5	3.8

注) サンプル数は3808人。

スピレーション）とがんばればとれると思う成績の水準（学業的能力の自己概念）は、いずれも現在の成績の自己評価と強い相関を示す。そして、アスピレーションと学業的能力

の自己概念の高さは、特に上位2カテゴリに自己の成績を位置づけているか否かによって、大きく異なっている。

図1-2-4 がんばればとれると思う成績（成績の自己評価別）



		がんばればとれると思う成績 (%)						
		1 (上のほう)	2	3	4 (真ん中)	5	6	7 (下のほう)
成績の自己評価	1 (上のほう)	98.1	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9
	2	78.1	21.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0
	3	36.6	58.7	3.2	0.3	0.4	0.3	0.0
	4 (真ん中)	22.1	48.2	26.8	2.1	0.2	0.1	0.0
	5	12.8	37.6	38.9	9.5	0.5	0.2	0.5
	6	13.1	21.4	35.8	27.0	1.6	0.2	0.2
	7 (下のほう)	18.3	12.6	21.3	31.3	8.5	3.4	3.2

注) サンプル数は3808人。

③成績観・学力観

「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」と「名門大学志向」が突出して高い比率を示す。「勉強本位志向（今は勉強することが一番大切）」は、5人に1人の割合である。第2回調査と比較して「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」が56.2%から45.3%へと大きく減少し、また第1回調査以降「勉強本位志向」が一貫して減少している（25.4%→23.9%→19.5%）。「名門大学志向」は上位ランクの高校ほど強く、逆に、「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「ともかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」は、いずれも学校ランクが下位の高校ほど強い。



あなたは、次のように思うことがありますか。

高校生の大半は少なくとも中位以上の成績をとりたいと考えている。そこで、この成績アスピレーションのあり方について、現在の学校生活の過ごし方や将来計画にかかわらせてもう少し詳しくみることにしよう。

6つの選択肢について回答を多い順に並べると次のようになる（図1-2-5）。

- ①(名門大学志向) できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい (54.9%)
- ②(ふつうの生活志向) 将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい (45.3%)
- ③(ともかく合格志向) どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい (27.9%)
- ④(学校生活エンジョイ志向) 学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない (23.6%)
- ⑤(勉強本位志向) 今は勉強することが一番大切なことだ (19.5%)
- ⑥(楽観的予測) そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう (10.7%)

とりたい成績を尋ねた場合、大半の生徒が「上位」と答えているにもかかわらず、現在の生活の中で勉強が一番大切だとする「勉強本位志向」は5人に1人であり、決して多数派とはいえない。高校生の多くにとって、勉強は必ずしも生活上の最重要事項ではない。

とはいえ、成績や学力にはこだわっていないというわけではない。学校生活が楽しければ、成績にはこだわらないという「学校生活エンジョイ志向」は、やはり4人に1人と少数派である。さらに、そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろうと、楽観的に予測している者も1割程度である。

それでは、どの程度の成績や学力が必要なのか。回答率が高かった項目は、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」と「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」の2つである。「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」と「名門大学志向」が突出して高い比率を示す。この2つに「ともかく合格（どこかの大学・短期大学に入れる学力）志向」が続く。成績アスピレーションには、「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「ともかく合格（どこかの大学・短期大学に入れる学力）志向」が相当程度含まれており、高校生の成績アスピレーションが単純に高い水準にあるとはいえないことがわかる。

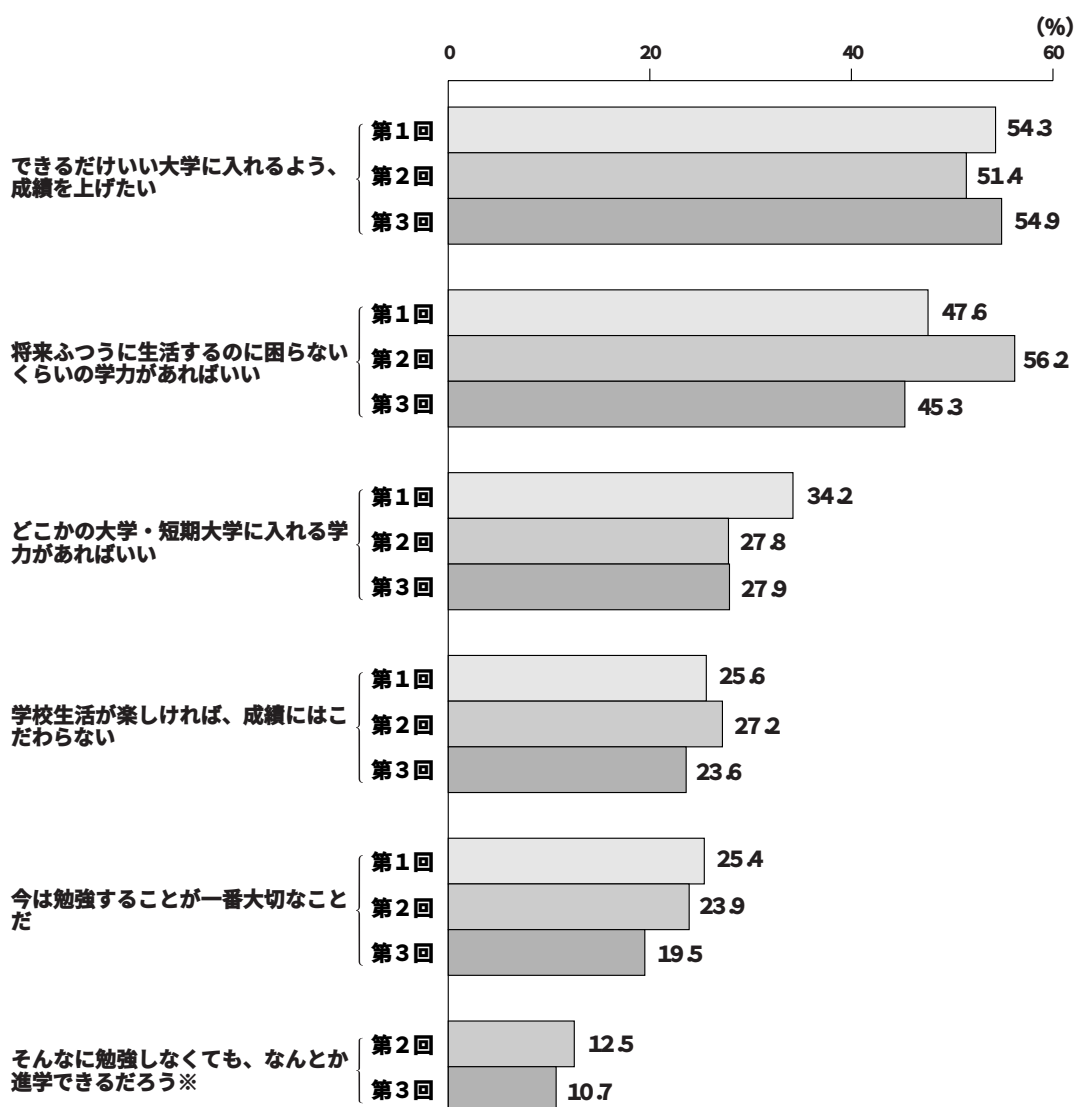
時系列的にみると、第2回調査と比較して「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」が56.2%から45.3%へと大きく減少し、また第1回調査以降「勉強本位志向」が一貫して減

少している（25.4%→23.9%→19.5%）点が目を引く。第2回調査時点では、「名門大学志向」が減少してトップの座を「ふつうの生活（ほとほとの学力）志向」に明け渡したが、第3回調査では「名門大学志向」が第1回調

査と同レベルにまで回復して、再びトップに立った。

これらの結果を学校ランク別にみると、学校ランクによる差が顕著である（図1-2-6）。「名門大学志向」（できるだけいい大学

図1-2-5 成績観・学力観（時系列）



注1) 複数回答。

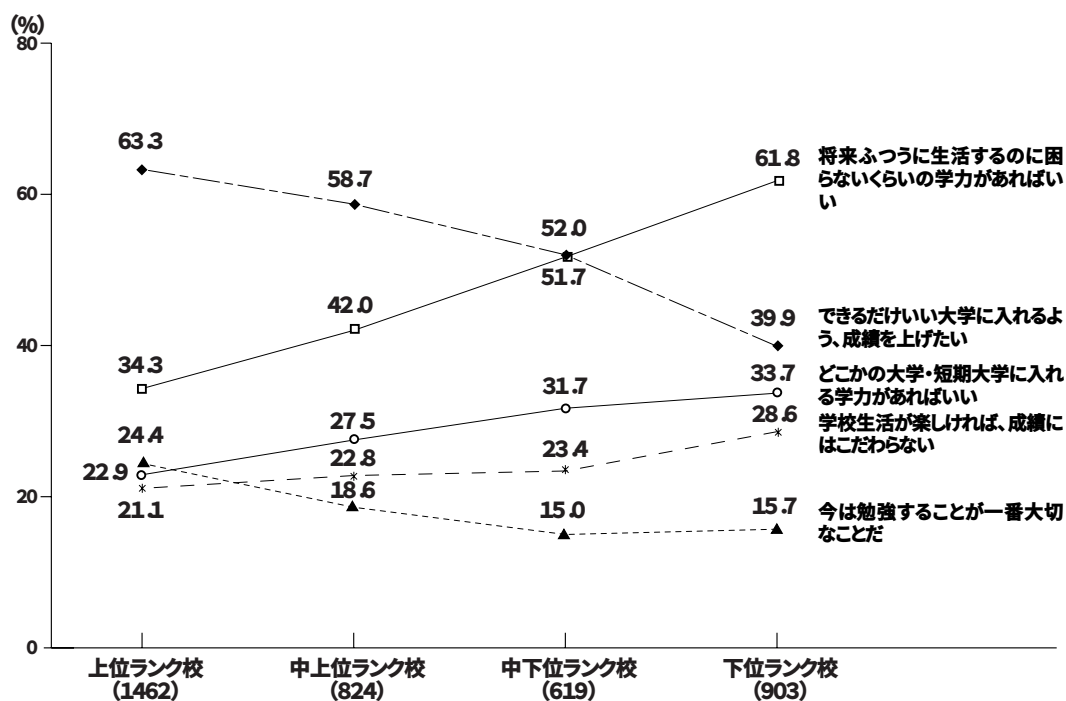
注2) ※は第1回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

に入れるよう成績を上げたい)は上位ランク校ほど強く、上位ランク校では63.3%に達する。逆に、「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」「とにかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」は、いずれもランクの低い高校ほ

ど強い。学力や成績に対する構えは、それを量的な水準という角度からだけみているとあまり明確ではないが、このように学校ランクによって鋭い分化をみせている。

図1-2-6 成績観・学力観(学校ランク別)



注1) 複数回答。

注2) () 内はサンプル数。

④よい成績をとるのに大切なこと

よい成績をとるのに大切なと考えられているベスト・スリーは、「努力」88.0%（「とても大切」の割合）、「上手な勉強法」78.8%、「授業をしっかりと聞く」78.7%である。ここには高校生の成績や学力の向上における、精神（努力）主義（努力と強い意志）、自分主義（運や人の助けではなく自分の努力や態度が大切）、学校（日常的構え）重視、技術主義（上手な勉強法）が現れている。時系列的にみると、多くの項目で「とても大切」とする回答が増加していることが目立つ。あれもこれもが成績を向上させる上でより大切だと認識されるようになっている。



よい成績をとるためには、次のことはどれくらい大切だと思いますか。

高校生は、よい成績をとるためには、どんなことが大切だと考えているのだろうか。「努力」や「運」など10項目を設定して、それぞれについて「とても大切」から「ぜんぜん大切でない」まで4段階で答えさせた。「とても大切」の数値に注目して回答を多い順に整理すると次のようになる（図1-2-7）。

①「努力」88.0%、②「上手な勉強法」78.8%、③「授業をしっかりと聞く」78.7%、④「教え方の上手な先生」56.7%、⑤「人に負けたくないという気持ち」56.6%、⑥「自分に合った問題集・参考書」44.0%、⑦「運」25.7%、⑧「生まれつきの能力」23.4%、⑨「家族の協力」13.7%、⑩「よい学習塾や予備校に行く」7.4%となる。

ベスト・スリーは「努力」「上手な勉強法」「授業をしっかりと聞く」であり、この3者はいずれも8割程度以上の回答を集めている。

この結果は次のように解釈できるだろう。第一に、「努力」がもっとも多く、「生まれつきの能力」が第8位にすぎないことから、成績は生得的な能力の反映であるよりも、後天的な努力の積み重ねによって向上できるものであるという認識である。10項目の中からもっとも大切だと思うこと1つを選択させた結果でも（図1-2-8）、「努力」は58.8%と

他を圧倒的に引き離して第1位の数値を示す。実際に学習にどの程度努力しているのかは別として（p.29～33参照）、学力、成績が努力の反映であるという意識は、いまだ根強い。この成績向上の手段としての努力信仰は、「人に負けたくない気持ち」（56.6%）と結びついて、努力＝強い意志→成績向上という一種の精神主義を形成しているように思う。

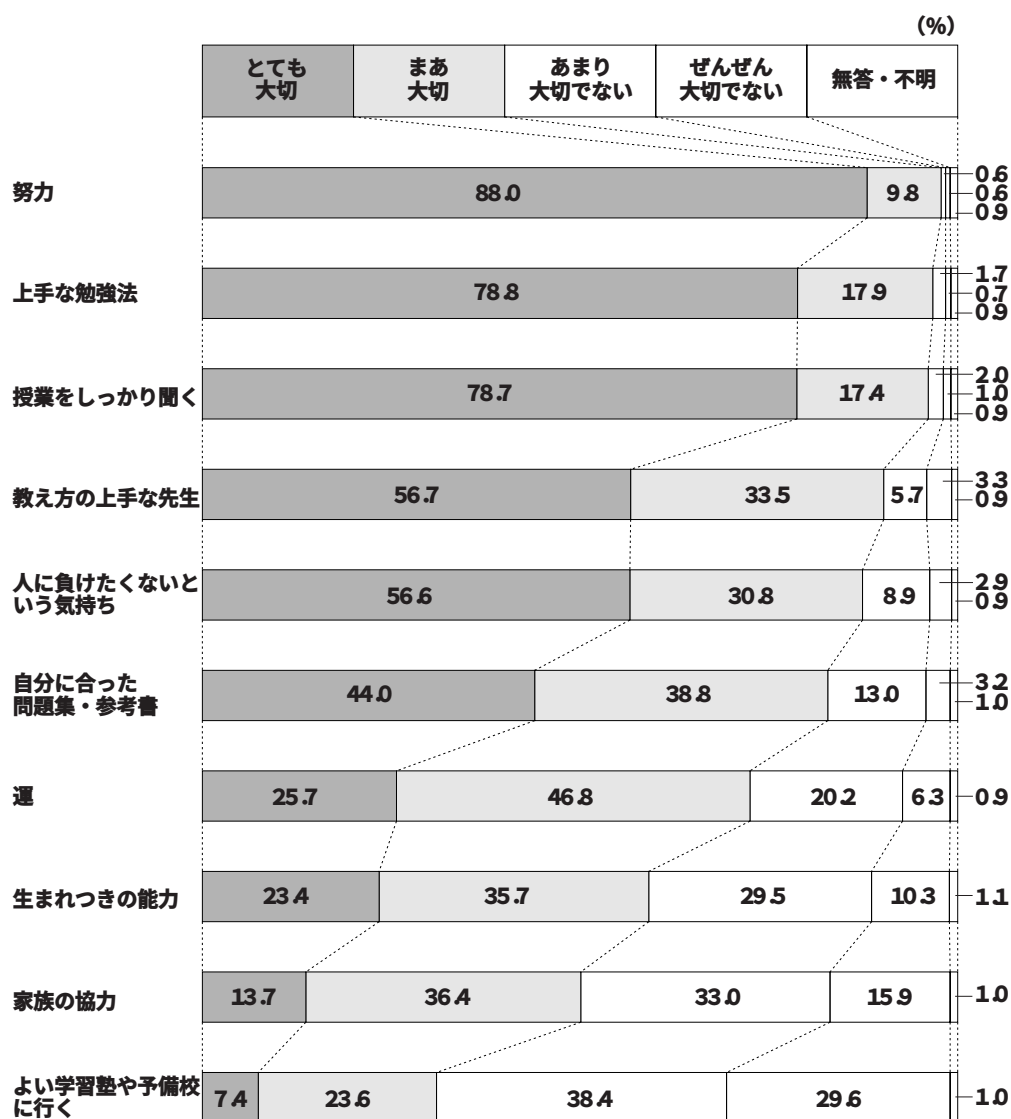
第二に、成績の向上は、運や人の助けではなくあくまでも自分の努力ややる気、構えの結果であると考えられていることである。学力形成における「自分主義」である。成績向上にとって、運や家族の協力が大切だという回答はごく少ない。仮に成績が不振だった場合には、その原因を運、他者や環境に帰属させるのではなく、自分の努力や意志に原因を求めざるをえないことになる。

第三に、学習塾や予備校といった学校外学習機会よりも、授業をしっかりと聞くことのほうが大切だと考えられている。これは、学校での授業、しかも日常的な授業における構えの重要性を認識している結果と解釈できる。学力形成における学校重視、日常的構えの重視である。第四に、とはいえ、成績の向上が、単にがむしゃらな日常的努力や人に負けたくないなどの精神力のみによって可能だと考え

られているわけではない。「上手な勉強法」が大切だという回答は約8割に及ぶし、また「教え方の上手な先生」「自分に合った問題集・参考書」をあげる者もそれぞれ56.7%、

44.0%ある。ここには、成績の向上には努力、精神が必要なだけでなく、効率的な学習法が必要であるという「技術主義」もまた存在している。

図1-2-7 よい成績をとるために大切なこと



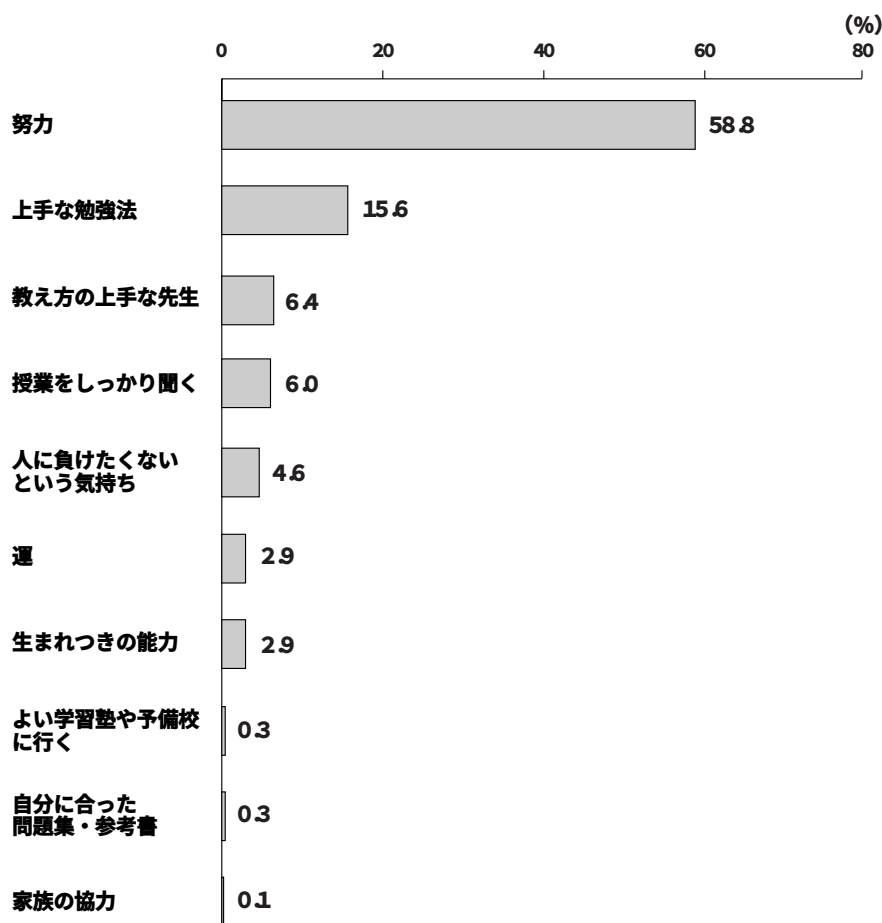
注) サンプル数は3808人。

これらを時系列的にみると、多くの項目で「とても大切」とする回答が増加していることが目立つ（図1-2-9）。どれかが減少して代わりの項目が増加するという変化の仕方ではなく、「努力」も「上手な勉強法」も「教え方の上手な先生」も「授業をしっかり聞くこと」も大切……あれもこれもが成績を向上させる上でより大切だと認識されるよう

になっている。

学校ランク別にみると（図1-2-10）、①「人に負けたくない気持ち」と「教え方の上手な先生」が下位ランクの高校生で少なく、②「努力」が上位ランク校、中上位ランク校で多く、③「自分に合った問題集・参考書」が上位ランク校で多いという結果が出ている。

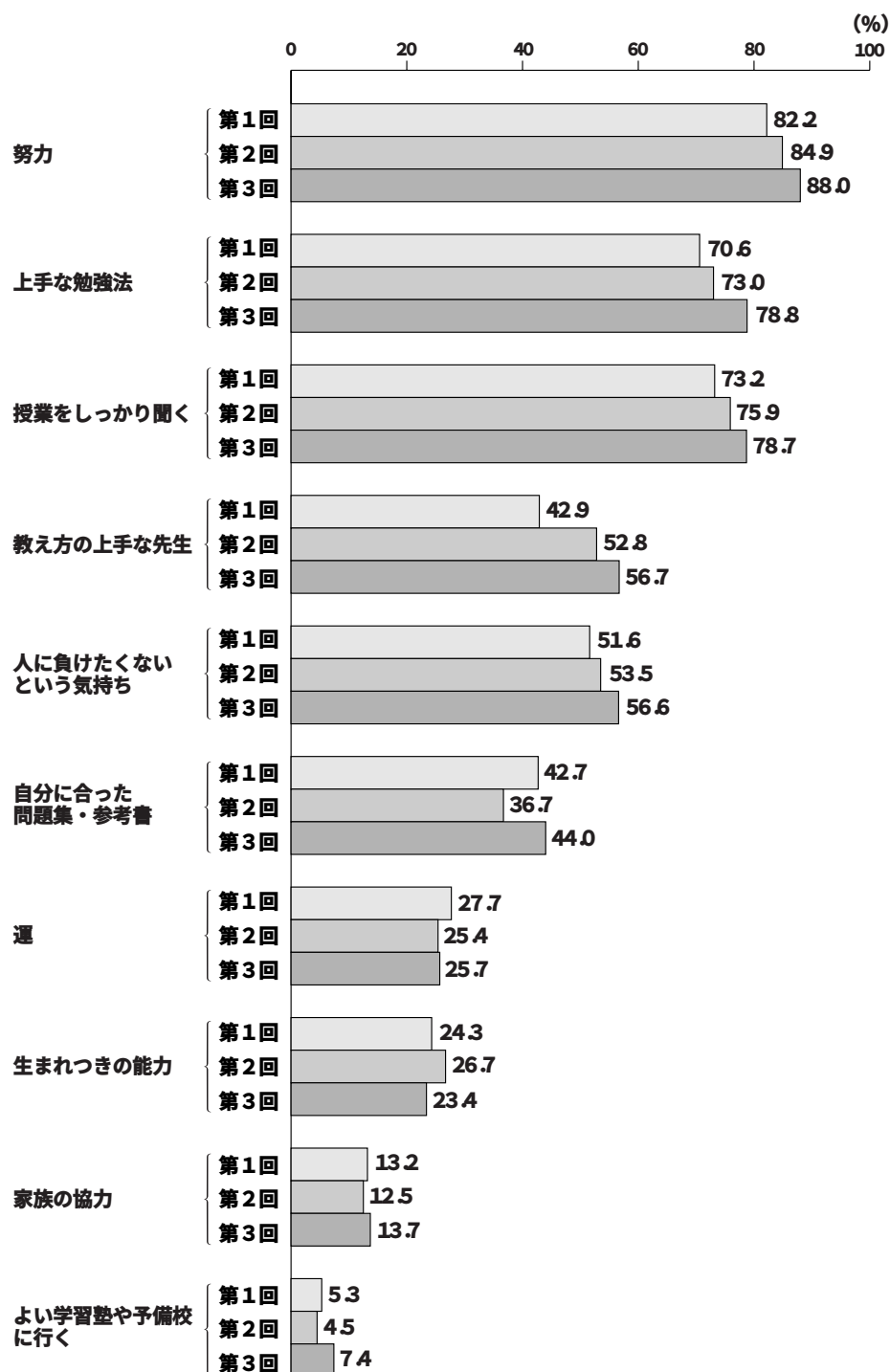
図1-2-8 よい成績をとるのにもっとも大切なこと



注1) 10項目中1つを選択。

注2) サンプル数は3808人。

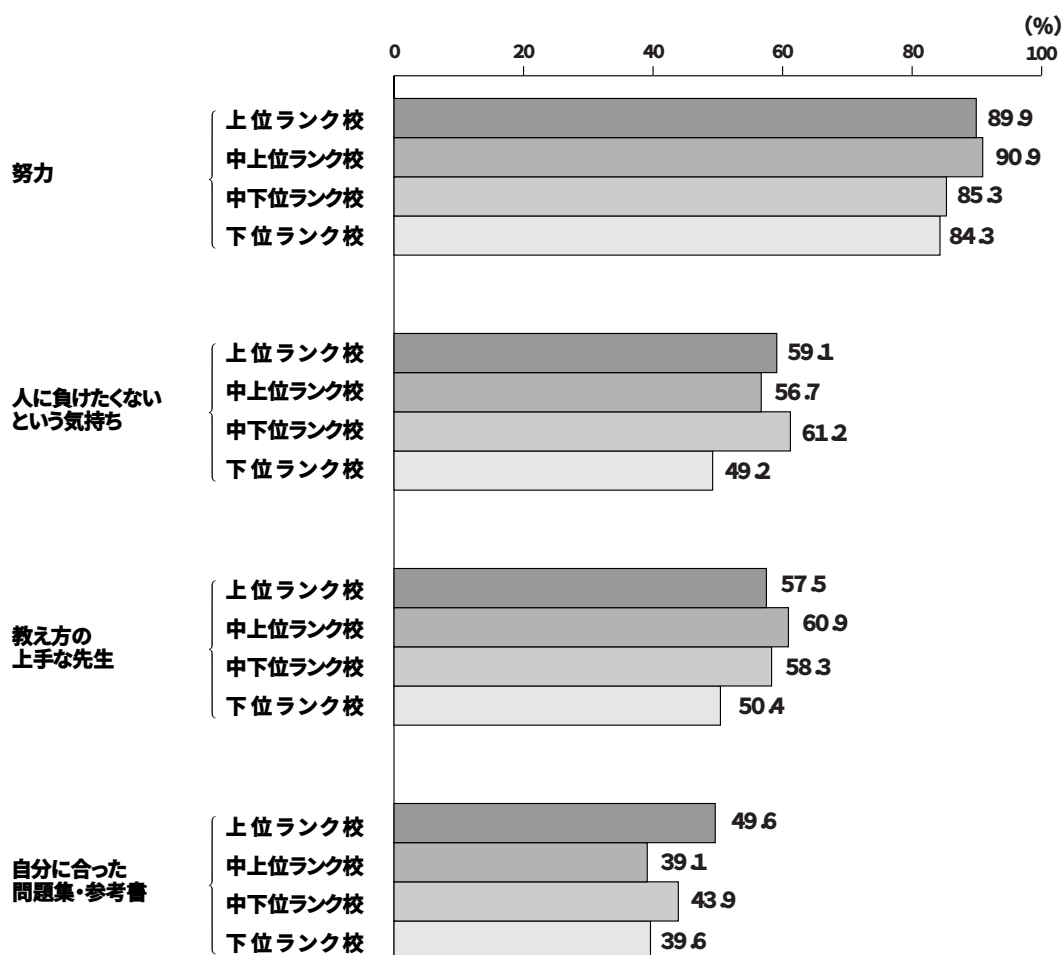
図1-2-9 よい成績をとるために大切なこと（時系列）



注1) 数値は「とても大切」の割合。

注2) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

図1-2-10 よい成績をとるために大切なこと（学校ランク別）



注1) 数値は「とても大切」の割合。

注2) サンプル数は、上位ランク校1462人、中上位ランク校824人、
中下位ランク校619人、下位ランク校903人。